

[普及事項]

成果情報名：岩盤清掃によるギバサ漁場造成技術の開発

研究機関名 水産振興センター 増殖部・総務企画室

担当者 柳原 陽・甲本亮太

[要約]

岩盤表面を露出させる清掃及び母藻の設置を定期的に行うことで、ギバサ漁場の造成と維持が可能になり、漁獲量の安定化に繋がることが期待される。

[キーワード]

ギバサ、アカモク、岩盤清掃、漁場造成、漁獲量安定化

[普及対象範囲]

採藻漁業者

[ねらい]

ギバサ（以下“アカモク”）は、本県で古くから食されている海藻であり、近年は健康効果が注目されていることから加工品原料として県内需要が高まっているが、本県沿岸におけるアカモク漁場は縮小傾向にある。そこで、岩盤清掃によりアカモクの生育を妨げる海藻等を除去し、アカモクが育ちやすい漁場を造成することで、漁獲量の安定化に繋げることをねらいとした。

[成果の内容及び特徴]

- 1 アカモクの生育を妨げる海藻類を除去し、アカモク優占群落を維持すれば毎年安定した漁獲が期待できると考え、コンクリート礁の最上面（面積4㎡）をカマ及びスクレーパで清掃してから、種（幼胚）を持った母藻を礁中央に設置し、翌年のアカモク収穫量を調査した。
- 2 カマ清掃区では、清掃後に残った根から再生したアカモク以外のホンダワラ類が76%を占め、アカモクの占める割合は23%にとどまった。
- 3 一方、スクレーパ清掃区では、93%をアカモクが占める結果となった。
- 4 海藻類を基部から刈り取るカマ清掃よりも、岩盤表面の海藻類を根こそぎ除去できるスクレーパ清掃の方が、より効率的にアカモク漁場を造成できることが明らかになった。

[成果の活用上の留意点]

- 1 岩盤清掃は手作業であり、一度に清掃できる面積が少なく作業効率に課題があるため、グラインダー等の導入により清掃作業の省力化を検討する必要がある。
- 2 成長が早い1年生海藻のアカモクは、新たな岩肌に1年で優先群落を形成するが、その後は他の海藻が成長し、アカモクは減少するため、岩盤表面を露出させる清掃及び母藻設置は定期的に行う必要がある。

[具体的なデータ等]



図1 スクレーパでの岩盤清掃の様子



図2 礁中央に設置した母藻

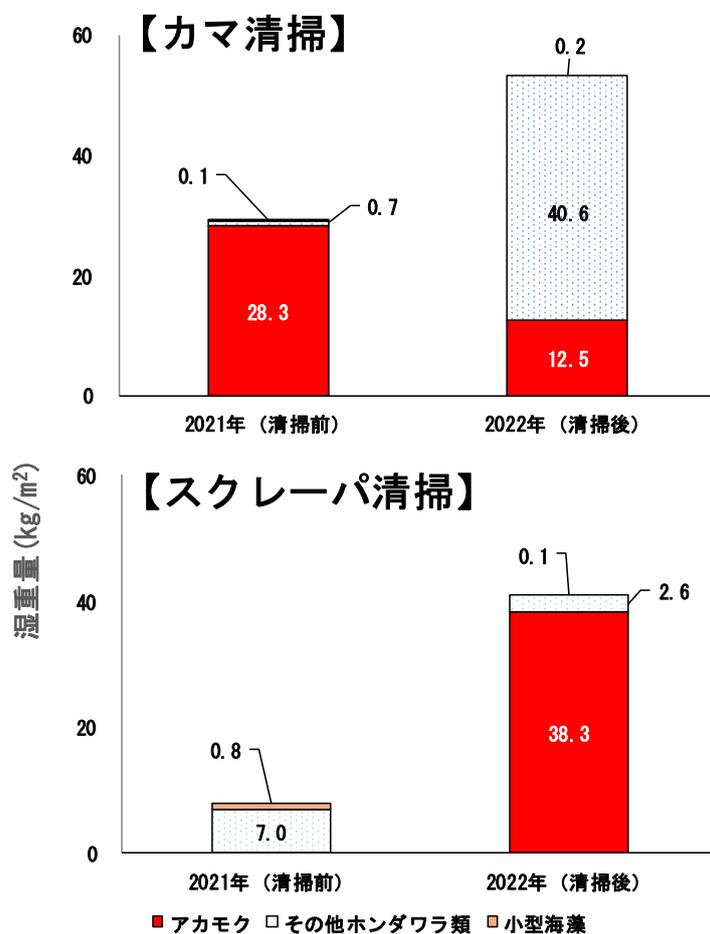


図3 刈り取り海藻重量の変化

[その他]

研究課題名：磯根資源の管理と蓄養殖技術の開発

研究期間：令和4年度～令和8年度

予算区分：県単

掲載誌等：秋田県水産振興センター広報誌「群来」第78号（2020）